

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.14 昭和63年12月5日



No.72 遺跡の人面把手 正面は、土器の内側を向いており、中に貯えられた穀物などを守るためと  
考えられている。このように土偶のような形態の把手は珍しい。

再び丘陵に立って  
常務理事 伊藤陽介

八月一日付で現職に就任し、九月から埋蔵文化財センターの業務にも係わることとなった。

思えば、十七年程前の都教育庁文化課長在任当時、新都市開発は緒に就いたばかりで、多摩丘陵は、まさに自然の姿を色濃く保っていたものである。

久し振りにニュータウンの一角に立ち、変貌の大きさに驚き、近代的なまちに住む人々が、この地に五十年もの昔から先人の生活のあったことを思い起こしてくれるだろうか、うたた感懐を禁じ得なかった。

三千ヘクタールを越える南多摩新都市建設事業も終盤に入った。開発との調整を図りつつ、遺跡を都民共有の文化遺産として保護活用し後世に引き継ぐという当センターの役割は重い。

関係各位の御理解、御協力を切にお願いいたします。

## 遺跡だより⑨

—多摩ニュータウンNo.200遺跡—



今回は八王子市南大沢地区のNo.200遺跡を紹介します。本遺跡は多摩丘陵の西南端、丘陵の途切れる南向き斜面に位置しています。標高180mを測る遺跡頂上付近からの眺望は素晴らしく、眼下には境川をはさんで相模原・橋本の市街が見下ろせ、さらに快晴の日には遠く丹沢山地の山並みを楽しむこともできます。

発掘調査は今年の4月から始めて、現在も継続中ですが、ほぼ全容を把握しています。今までに発見された遺構・遺物は主に縄文時代早期(約九千年前)のものが中心ですが、古墳時代の「方形周溝墓」とよばれる墓跡も見つかり関心を集めています。

縄文時代の遺構としては、住居跡、屋外炉、土坑等があります。住居跡は頂上から南側にやや下がったところに、2〜3軒見つかっています。屋外炉は収穫物を煮たり、焼いたり、蒸したりした場所と考えられますが、全部で40数基も見つかつており、食事時のあわただしい様子が思い起こされるようです。土坑は狩猟用の陥穴と考えられますが、本遺跡では4基のみです。多摩ニュータウン地区の他の遺跡では数十基もまたまつて見つかったののに、この少なさは何を物語っているのでしょうか。今後、いろいろと考えてみる必要があります。

さて次に、古墳時代の方形周溝墓を見てみましょう。発見されたのは遺跡頂上西端寄り、幅約1m、深さ約0.8m程の溝をほぼ正方形に回らせ、その中央付近に遺体を葬ったと考えられる長方形の穴が見つかりました(方形周溝墓の命名の由来はこの全体の形状にあります)。溝を調査中に、完形になる壺型の土器が出土し、底部に穿孔が施されています。このように、方形周溝墓から底部に穿孔のある土器が出土する例は珍しくなく、死者を祀る時の特殊な意味をもった土器と考えられています。また、遺体を葬った中央の穴を「主体部」とよんでいます。ここからは鉄製の矢じりとガラス玉、土器の破片が僅かに出土しました。おそらく、遺体と一緒に納めたのでしょう。溝を掘ったりして、けっこう手間のかかるこれだけの墓にどのような人が葬られたのでしょうか。今までの調査で付近に同時代

の村の遺跡があると予想されているので、もしかすると、その村の村長クラスの人々の墓かもしれません。興味のないところでは、本遺跡の周辺にもニュータウン事業に係わる遺跡が

沢山あり、今後調査が進めば、さらにこの地区の興味深い歴史が分かってくることでしょう。

(田中・鶴間・内野)



方形周溝墓と壺形土器

文化財講座 <10>

「やきもの」のうつりかわりⅢ

縄文土器の造形上の特徴は一体どこにあるのであろうか。これを一言で説明することは大変難しいが、日本考古学の開祖である彼のE・S・モースは、大森貝塚の縄文土器を報告するなかで、その特徴を器形と文様の多様性にありと指摘している。教科書などでは弥生土器との比較で語られることが多く、このモースの指摘が引用されることはほとんどないが、彼が大森貝塚の土器の観察にみせた卓見は、そのまま現在でも縄文土器の特徴として通用するものである。

今回はその特徴の一つである土器の文様についてみてみることにしよう。縄文土器を代表する文様は、いうまでもなく撚り紐を用いた縄文である。しかし、縄文土器の文様は決してその名前の由来を示す縄文の歴史に終始するものではなかった。縄文人たちは撚り紐の他に貝や縄の施文具を駆使して新しい文様を開発し、採用していったのである。特に縄文時代の前半期には施文具と施文方法に工夫を凝らして、異常なまでに多様な文様を発達させたが、後半期になると対照的に貝や縄等、施文具の形をそのまま土器面に写しとる文様は衰退し、粘土紐や篋を用いて「描く文様」へと様変わりしてしまう。

文様のもつ意味、果たした役割についてはよく判っていないが、この文様にもられる様変わりは、前期の中頃以降、縄文土器が次第に用途を分化させ、器種を増やしていく過程とよく符合しているようにみえる。土器の文様は単に美への関心によって惹き起こされた流行の産物ではなかったようである。

多摩の歴史を訪ねて⑩

多摩の豪族大石氏 その二

「庭園に高閣あり、矢倉など相かねて侍りけるや、遠景勝りて、数千里の江山眼の前に画きぬとおもほゆ」

「回国雜記」の著者道興准后は文明十八年(一四八六)十一月、「大石信濃守といへる武士の館」について記載しています。記載内容から推測して、著者が訪れたのは河川際の丘陵上に築かれた山城であったと考えられます。「武士の館」を大石氏のどの城に想定するかはまだ検討の余地がありますが、八王子市高月町所在の高月城は、多摩川と秋川の合流地点に南から突き出した舌状の丘陵上に存在し、先の記載と通じる点が多く、道興准后が訪れたのはこの高月城であるとする説が有力です。

高月城跡を訪れてみますと、今でも曲輪・土塁・空堀・井戸の跡がひっそりと山中に残っていて往時を偲ぶことができます。

高月城の築かれている加住丘陵を多摩川沿いにしばらく東にいった所に、滝山城があります。「新編武蔵国風土記稿」によれば滝山城は大石源左工門定久が築いたとされています。後に大石氏が小田原北条氏に服属し、北条氏照を養子に迎えてからは、小田原城の支城、氏照の居城として、天正年間頃まで使用されました。

滝山城を訪れて、まず感動するのは丘陵をぬって走る土塁・空堀群の偉容です。

その幅と深さも然る事ながら、「柵形・横矢・食違い・馬出し」等中世山城のもつ防御構造をほぼ一通り見つける事ができ、中世城郭研究にこの上ない資料となっています。

滝山城が大石氏の時代から現在の規模を有していたとは考えられません。おそらく、今日「本丸」「二の丸」と呼称している曲輪の部分

が当初大石氏が利用したもので、氏照の時代になり順次拡張され、今日の姿になったものと考えられます。

滝山城の最も重要な歴史的な事件は、やはり武田信玄に攻められたことでしょう。永禄十二年(一五六九)に信玄は小田原城攻略の途次その支城である滝山城を攻撃しました。攻防は熾烈を極めたらしく、甲斐の軍勢は三の郭まで攻め込み、これを氏照以下の城兵がよく防戦したと「甲陽軍鑑」に記されています。

北條家城跡 圖



(内野)

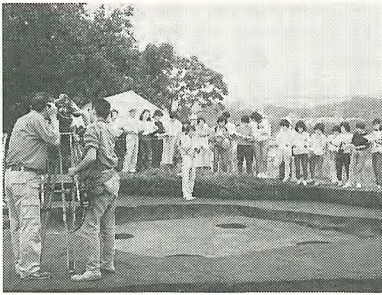
遺跡見学会と文化財講演会

9月10日、多摩ニュータウンNo.446遺跡において、遺跡見学会を開催しました。約350名の見学者があり、縄文時代のむらや古墳時代の窯跡が公開されました。

10月1日、都立大学峰岸純夫先生による「多摩の中世を語る」と当センター主任研究員加藤修による「多摩丘陵の中世遺跡について」の文化財講演会が催され、120名の方々の参加がありました。

展示会の開催

日本列島発掘展が8月3日、大阪、梅田大丸ミュージアムで盛大にオープンしました。東京での開催は、来年、3月2日～3月14日、場所は東京大丸デパートです。東京の遺跡展も10月13日から銀座ソニービルを皮切りに、立川ウィルで10月30日まで開催されました。御岳神社の大鏡、都内全域から集められた、中世の板碑の展示が人気を集めておりました。



遺跡見学会

アジアから考古学者の来所相次ぐ

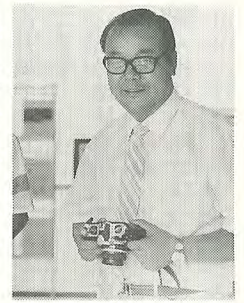
韓国から嶺南大学教授鄭永和氏(8月16日)、中国から中国科学院古脊椎動物考古人類研究所黃慰文氏(8月22日)、トルコ共和国からイスタンブール博物館学芸



東京の遺跡展

員アルゴン・アタシエリー氏(9月22日)、アンカラ大学教授レキハン・アルク、オルシエ・アルク氏夫妻(10月3日)がそれぞれ来所されました。

黄慰文氏には「中国における考古学の現状」というテーマで講演をお願いしました。



鄭先生

昭和63年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会の開催

北海道埋蔵文化財センターのお世話により、札幌市をスタートして9月20～22日の3日間旭川までバスを利用して実施されました。管理運営部会は、苫小牧市美沢3遺跡の発掘事務所のテナント内で「発掘調査現場における管理的業務の現状と課題について」討論を行いました。調査研究部会は「新千歳空港建設に伴う遺跡発掘調査の現状と課題について」を、調査中の現場内で意見の交換を行いました。2日目の朝、研修に先立ち北海道東海大学教授岡田淳子氏による「北海道文化の形成」の講演がありました。当センターからは、伊藤理事、石井調査研究部長、原川・鶴間調査研究員、古坂事務主事の計5名が参加しました。

映画と講演の会

12月3日(土)、午後1時～3時45分、当センター会議室において映画と講演の会がありました。映画は、「カラムシと麻」講演は、竹内淳子氏による「古代の布を語る」でした。約100名の方々の参加がありました。

トピックス

8月5日 当センター佐藤宏之調査研究員(財)とうきゅう環境浄化財団から研究助成金を受けました。10月8日～10日 日本考

古学協会大会が静岡市において開かれました。10月28日 全理協関東ブロックの協議会が前橋市で開催されました。11月10・11日 全理協役員会が東京青山会館で開催されました。

人の動き

▼8月1日付けで、小平邦人総務課長が都立日比谷図書館へ、後任に都立工業センターから、杉岡幸明が着任しました。▼8月30日、高橋初男常務理事が任期満了により退任、伊藤陽介常務理事が就任しました。

▼9月30日付けで調査研究部調査研究員尾垣勝彦が退職しました。

発行  
財団法人東京都教育文化財団  
東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合1-14-2  
☎ 0423-73-5296  
0423-74-8044  
昭和63年12月5日